

たかが助詞、されど助詞

桑原 正紀

TBSテレビの「プレバト」という番組が好きという方が多い。私もそうである。お笑い芸人やタレントたちが俳句制作に挑み、俳人の夏井いつきさんが点数をつけて批評をするのだが、芸人たちの丁々発止のやりとりが並みのバラエティー番組よりおもしろい。中には俳人顔負けの秀作を提出する芸人もいて、千原ジュニアもその一人だ。

手花火の火に手花火と手花火を

先日もこのような作品を発表して夏井さんをうならせていた。「手花火」という季語を三度繰り返すという、頭の固い俳人には一刀両断にされそうな冒険作であるが、若い父と母と子といったような三人の人物や関係が鮮やかに浮かび上がってくるところがすごいと思った。もう一つ掟破りがあって、それは一句の中に助詞を四つも使っていることである。短歌でもそうだが、助詞の多用は説明的になってしまう。しかし、この作品の「の」「に」「と」「を」は省略しがたく緊密に機能している。だからこそ三人の人物

像が瞬時に映像として浮かぶのだ。

このように、助詞をうまく使うことができるようになると、表現のおもしろ味は各段に増す。以下、短歌における助詞の使い方、また省き方について考えてみる。

ゆで卵つるりむきをへしばらくを手は満ち足りて朝か
げのなか
小島ゆかり『雪麻呂』

耳動く窓辺いつしか茜いろ猫は自分に飽きることなし

同 右

小島さんの歌集はさまざまな面で恰好の教科書である。助詞の使い方ひとつをとってみてもそれが言える。二首に共通しているのは、下句に主題があるという構造。そこに至るまで助詞はなかなか出てこない。なにげなく助詞を省くか、あるいは避けた表現で貫いている。そうすることで文脈が理に傾かず、リズムと気分を優先した背景が形成されるような構造になっているのだ。そして、やつと出てくる助詞を含んだ文脈がひときわ立ち上がってくるのだ。こういうところが実にうまい。

ゆきかへるブランコたのしゆきかへるたびすれちがふ
だれかれのかは
同 右

この歌に助詞はたった一つ、結句の「の」しかない。これはもう技法意識を超えた天性の感覚のように思われる。こんなところにも小島短歌の秘密が隠されているのかもしれない。たかが助詞、されど助詞——。